

様

年 月 日

## F P (シスプラチンと5-FU併用) 療法









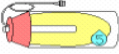
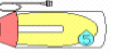


この治療では次の2種の治療薬を使用します。

**シスプラチン**：細胞のDNAや蛋白合成を妨げ効果を現します。5-FUの効果を強めます。

**5-FU**：細胞のDNAやRNAの合成を妨げ効果を現す。持続で注入することで効果が強まります。

<投与スケジュール> . . . 4週間が1コース

今回 コース目

<薬品名> <投与方法・時間>	<薬の作用>	1コース目					2コース目 28~31日目
		1日目	2日目	3日目	4日目	5日目 . . .	
パロセトロン、デキサト、輸液 <点滴静注30分>	吐き気予防		休薬				
輸液 <点滴静注120分>	腎障害予防		休薬				
マンニトール20% <点滴静注60分>	利尿剤、腎障害予防		休薬				
シスプラチン注 生食250ml <点滴静注 60分>	化学療法剤		休薬				
5-FU 輸液 <持続点滴 5日間>	化学療法剤	持続注入ポンプ 				休薬	
輸液 <点滴静注120分>	腎障害予防		休薬				

### <薬剤投与日の注意>

- ★ 点滴部位が痛くなったり、腫れたりした場合や点滴が落ちなくなった場合は、薬液が血管外へ漏れていることがありますので、すぐに申し出てください。
- ★ 薬剤の投与は、血液検査やその他必要な検査を行いながら進めていきます。副作用の発現・合併症の有無によって治療の途中でも、薬剤の減量・変更や中止されることがあります。

<備考>



## <副作用>

副作用と症状	発現時期、頻度	対策	メモ
白血球減少 発熱 風邪様症状	10～14日後	うがいや手洗い・休養を心がけて下さい。白血球を増やす薬や抗生物質を使うこともあります。	
血小板減少 出血	—	けがや打ち身、歯ぐきからの出血、鼻血などに気をつけて下さい。止血剤を使ったり、輸血をすることもあります。	
貧血 倦怠感 息切れ	—	採血結果によっては、造血剤を使ったり、輸血をすることがあります。	
吐き気・嘔吐	—	我慢せずに吐き気止めを使用してください。	
下痢・腹痛	約3割	水分摂取を心がけて下さい。下痢止めや整腸剤を使用してください。重度の場合は点滴をすることもあります。	
口内炎	4人に1人	うがい薬や塗り薬を使います。	
腎障害	—	水分摂取に心がけ、尿量を多くしてください。	
間質性肺炎、肺障害	非常にまれ	空咳、息切れ、呼吸困難、発熱など。早期発見が大事。	
過敏症（アレルギー） 顔がほてる 息苦しい、胸が苦しい 発疹、かゆみなど	非常にまれ	予防薬を使いますが、症状があればすぐに申し出て下さい。	
白質脳症	非常にまれ	口のもつれ、ふらつき、物忘れなど。早期発見が大事。	
その他：発熱、倦怠感、心障害、視力障害、脱毛、手足症候群など			

- ★ 放射線療法と併用することがあります。その場合はより口内炎やのどの粘膜障害がより強く現れます。うがい薬などを早めに使用し予防に努めてください。
- ★ ここにあげた副作用は、代表的なものです。必ずしもこれらの症状が現れるとは限りません。副作用が現れても、早期に発見、対処すれば、治療の継続が可能です。過剰に心配せず、気になること、調子の悪いことがあれば、医師・薬剤師・看護師に申し出て下さい。